

# 江川活版二号行書仮名

日本の活字書体史上もっとも個性的な行書

小宮山博史

日本活字史上江川行書ほど個性的な行書は出現したことがありません。唯一無二ともいえるべきこの行書を揮毫したのは書家の久永其穎で、江川次之進の創業（明治一六年）になる江川活版製造所の主力書体です。

日々の生活での筆記はまだまだ毛筆手書きであった時代、人々の生活に合わせたのか楷書体、行書体、草書体、隸書体活字が数多く制作されました。たとえば小室樵山の弘道軒清朝体、湯川梧窓の南海堂草書・行書・隸書、吉田晩稼の晩稼流など書家が揮毫した書体をあげることができます。

この江川行書は明治二〇年頃から母型製造に着手したと『印刷

雑誌』第一巻九号（明治二四年一〇月）に掲載された江川活版製造所の広告に書かれていきます。<sup>★図四三</sup>この広告の江川行書のサイズは右の八行は二号、次の注意書きは五号、黒丸の下は二号、社名は一号、支店名は二号、住所は五号です。江川活版は『印刷雑誌』第二巻第九号（明治二五年一〇月）に三号行書の発売予告（一月一五日発売）<sup>★図四四</sup>広告をうちます。

江川活版三号行書の覆刻には、発行が明治四〇年頃と思われる青山進行堂の総合見本帳『活版略見本』をはじめとして、いくつもの印刷物および活字を使用しました。江川活版の総合あるいは総数見本帳は残念ながら見えておりません。それらを刊行したかどうかも実はわかりません。

漢字は一字の中のある画を筆の腹を使って思い切り太め細太のコントラストを強調した造形で、この傾向は片仮名にも見られます。平仮名は細太の差はありませんが、その字形は奔放、線質は勁烈で誰でも書けるものではありませんが、現在のタイプデザイナーにはとても歯が立たない造形でしょう。ただ活字という正方形のボディの中に、本来自由闊達であった文字を収めようとしたとき、書とはすこし違った造形にならざるを得ないのかもしれない。しかし驚くほど個性的です。この書体をどう使いこなすか、とても興味あるところです。

覆刻にあたって原字用紙にトレースし、墨を入れる作業は思ったほど難しくはなく、線の動きと墨入れの手の動きには乖離がなく、自然に運筆できたとはい印象が残りませんでした。

☆註四六……弘道軒清朝体 弘道軒は神崎正誼（かんざきまさよし）が創設した活字鑄造所の屋号。清朝体の名称は先行する明朝体に対抗する命名か。書家小室樵山が揮毫した弘道軒清朝体は日本活字史上もとても峻烈な線質を持つ楷書体である。明治八年九月二五日付東京日日新聞第一一三二号に開業広告を差し込むこの「活字鑄造敬告」には初号から七号までの八書体の見本が掲げられている。明治一四年頃この書体をめぐって築地活版との間で日本最初の抗争問題がおこり、築地活版は清朝体活字を作らない、弘道軒は明朝体活字を作らないという条件で決着したというのが疑問。東京日日新聞は明治一四年八月一日付第三九一六号から二三年二月一日付第五四八八号まで、約一〇年間本文活字として使用。書籍を含めこの楷書活字は本文用として使われた唯一無二のものである。種字は金属材料への直刻。

☆註四七……南海堂 南海堂は書家湯川梧窓の号。湯川梧窓揮毫の南海堂行書・草書・隸書は青山進行堂活版製造所から販売。南海堂行書は明治二八年頃から岡島活版製造所が制作していたが、明治三六年に青山進行堂がこの行書を継承し、つづいて南海堂の揮毫による草書と隸書を販売した。

☆註四八……晩稼流 明治三四年、京橋の国光社が制作販売した教科書用活字書体。揮毫は明治の有名書家吉田晩稼でその名前を使ったのであろう。府川充明氏によれば靖国神社の大石標や陸軍省など官庁の門標や大阪天王寺の本木昌造記念碑を揮毫。残念ながら手元の資料が見つからず図版として提示できない。

★図四一……弘道軒清朝体で組んだ「東京日日新聞」（明治二〇年一月六日第四五四四号、部分）と木版印刷の小室樵山編并書者「新撰人民万文字」（明治一一年九月刊）活字と手書き木版の書風と線質に若干の違いが見られる。金属材料への直刻により線質はより鋭くなったのかもしれない。<sup>〔六四〕一六五頁参照</sup>

★図四二……南海堂行書・草書・隸書 明治四〇年頃刊行の青山進行堂総合見本帳『活版略見本』収録。<sup>〔六六〕一六八頁参照</sup>

★図四三……江川活版製造所広告『印刷雑誌』第一巻第九号（印刷雑誌社、明治二四年一〇月）刊。この対向頁は活版製造所製文章（現大日本印刷）広告と清朝体活字を開発した弘道軒神崎正誼の死亡通知。<sup>〔六九〕一七〇頁参照</sup>

★図四四……三号・四号・五号を使って組んだ江川三号行書発売広告『印刷雑誌』第二巻第九号（明治二五年一〇月刊）。<sup>〔七一〕一七二頁参照</sup>



# 東京日日新聞

書体の覆刻

日曜木 日六月一年十二治明 可認局遞驛

官報

明治二十年一月四日

○(達)宮内省達第一號華族院學規則(前號ノ續)

第十五條 學習院及他ノ學校ニ在學ノ生徒ニシテ疾病ヲ除クノ外三週日以上ニシテ私ノ事故ヲ以テ課業ヲ缺クコトアルトキハ學習院生徒ハ學習院長ニ其他ハ宮内大臣ニ出願スヘシ宮内大臣及學習院長ハ正當ノ事由アリト認ムルトキハ之ヲ許可スヘシ

第十六條 學齡者ニシテ學習院ニ於テ修學セス他ノ學校或ハ他ノ教師ニ就テ修學スル者及海外ニ留學スル者ハ每學期其修業シタル課程ヲ記載シ華族局長官及學習院長ニ届出ヘシ

第十七條 學齡ニ至リ故ナシ學ニ就カサル者或ハ學ニ就クノ後修業ヲ怠ル者アルトキハ宮内大臣ハ華族局長官ヲシテ其戸主ハハ復見人ヲ督責セシム

第十八條 許可ヲ得テ他ノ小學校等ニ就學スル者ハ宮内大臣時宜ニ因リ相當ノ官員ヲ派遣シ修學ノ實況ヲ視察セシムルコトアルヘシ

第十九條 學齡者ノ就學未就學ニ關スル事項及其督責獎勵等ニ關スル事務ハ華族局長官ヲシテ之ヲ取扱ハシムヘシ

第二十條 華族局長官ハ毎年兩度一月八月ニ於テ來學年度華族ノ男子就學年齡ノ者ヲ取調ヘ其名簿ヲ作り宮内大臣ニ上申シ且學習院長ニ報告スヘシ

第二十一條 華族局長官ハ學習院外ニ在ル學齡者ノ修學ニ關スル事項ヲ取調ヘ時々之ヲ學習院長ニ報告シ又學習院長ハ學習院生徒ニ關スル事項ヲ取調ヘ時々之ヲ華族局長官ニ報告スヘシ

第二十二條 就學及修學ニ關スル督責ヲ受ケ正當ノ理由ナクシテ之ヲ廢慢ニ付スル者及紀律ヲ犯シ退學ヲ命セラレタル者ハ共ニ懲戒ノ處分ヲ被ルコトアルヘシ

## 雜報

○福岡宮中顧問官 同官1の御用1付き愛知縣下へ出張を命ぜられ不日同地へ發途せらる、由なり右の西京へ 御幸の御序を以て同縣下を 御巡覽あらせらる、就ての御用筋ありと云ふ

○龍驤艦の遠航 前號の紙上1記載せし如く同艦は采月中旬品川灣を出帆して印度洋より濠洲並1南米地方迄航海する由あり同艦の乗組員ハ海軍兵學校第一先進號生徒三十四名をりと云ふ

○海軍事件 昨暮海軍兵學校機關學校中へ技師を置かれ尉官機關士をして兼務せしめ又た或ハ技術優等の者を試験の上採用せられたりと云ふ又た横須賀造船所にてハ工務多端1付き造船1從事したる各職工二百三十餘名を雇入れて造船業1從事せしめられたり

○會計監督會議 各鎮臺會計監督1の采月下旬東京1於て會議を開かる、由なるが右の會議ハ新法實施以來の成績を具申し猶ほ實用を議せらる、が爲めなりと云ふ

○地所貸與中止 陸軍省御用地中現今不用1屬する場所ハ其の地方の人民1貸與せられたるが自今これを中止せられ所管鎮臺の作業場1充てらる、事1あり

○轉任 文部屬中村恭平氏ハ福島縣尋常師範學校長ニ轉任すべしと噂せり

○東海道鐵道 同鐵道第一區工事1使用あるべき材料ハ悉皆便宜の故へ輸送せられ其他の區も同様神戸大阪等の鐵道局より輸送濟となりしハ付同時起工1着手せらる、都合あれば竣工ハ豫定より迅速なるべしといふものあり

○化學試驗所新設 帝國大學1てハ今度構内へ化學試驗所を新設せらる、由1て其地形1着手せられたり

○船長の受験者1限らる 西洋形船舶乗組の運轉手ハ通信省の試験を経ざれば海員たるを得ざるの法なれども和船1至りてハ未だ試験を経ずして舊來の慣習1依り船長或ハ按針手となるを得べし是れ危険千萬の限りありとありて近1和船百石以上の船長たるべき者1



三六

二

諸	慈	出	義	五
母	母	母	父	父
心	養	嬌	師	親
工	母	嫁	母	父
姉	母	庶	十	養
妹	母	母	母	父
妻	乳	繼	親	繼
受	母	母	母	父

三六

二

父	甥	大	子
母	姪	男	孫
大	阿	小	叔
我	兄	弟	兄
祖	舅	姑	祖
父	母	姊	父
母	姪	姑	姊
曾	母	妹	父

字活書行堂海南號參

丁丈上下不丑且丕卅立  
 丙丞並个中串丸丹主井  
 乃久之乍身乏乘乙乞也  
 乳乾亂亂了茅事于云互  
 井亘些亟亟己爰亥尔亨  
 享京亭亮人付仁仄仆仇  
 令介仍仔他仗付仙全佻  
 仵代令以仲仲伴价任仿  
 企仇伊伍伎仗伐佻佻伯  
 伴伶伸伺似依何但停侑

いひろはははははははは  
 不海へ海とととととと  
 里ぬぬるるるるるるる  
 日かろよとたふふれま  
 イ口ハニホへトケリ又  
 ルヲツカヨ夕レソツネ  
 子ナラムウ井ノオクヤ  
 マ子フエエテアサキユ  
 一二三四五六七八九十  
 廿卅百千万壹貳叁拾

★図四二一……南海堂行書活字 明治四〇年頃刊行の青山進行堂総合見本帳「活版略見本」収録。

字活書草堂海南號貳

丁 丈 上 下 不 丑 且  
 世 丘 兩 丞 益 介 中  
 半 帝 九 丹 主 井 乃  
 久 也 亦 乞 宗 乙 乞  
 也 亂 亂 乾 了 予 子  
 于 云 互 豆 空 亞 亞  
 亡 乞 戎 亥 名 亨 亨  
 亨 亮 人 付 仁 仄 仆

ハ 九 十 壹 貳 參 拾  
 一 二 三 四 五 六 七  
 ヨ シ レ ツ ソ 子 示  
 テ リ ヌ ル チ ツ カ  
 イ 口 ハ ニ ホ ヘ ト  
 へ 扇 と 堂 と 古 志  
 に 小 一 丹 保 中 治  
 い 心 乃 治 は 二 七

四十八

★図四二二……南海堂草書活字 明治四〇年頃刊行の青山進行堂総合見本帳「活版略見本」収録。



字活書隸堂海南號貳

止	互	乾	乖	义	丰	世	丁
亢	井	亂	乘	乃	串	丘	丈
交	亘	了	乙	久	丸	丙	上
夾	况	了	乞	之	丹	丞	下
亦	些	事	也	丘	主	並	平
亨	亞	于	乱	予	井	个	丑
享	亟	云	乳	乏	又	中	且

一	シ	テ	ク	ナ	ヨ	チ	イ
二	エ	ア	ヤ	ラ	タ	リ	ロ
三	ヒ	サ	マ	ム	レ	又	ハ
四	モ	キ	ケ	ウ	ソ	ル	ニ
五	セ	ユ	フ	井	ツ	ヲ	ホ
六	ス	メ	コ	ノ	子	ワ	ヘ
七	ン	ミ	エ	オ	不	カ	ト

★図四二一三……南海堂隸書活字 明治四〇年頃刊行の青山進行堂総合見本帳「活版略見本」収録。

諸賢益々御清適奉實候備テ拙者製造ノ行書活字發賣以來特  
 ノ外御高評ヲ蒙リ需用日ニ増加シ業務繁榮ニ赴キ千万難有  
 奉謝候抑右行書活字ノ義ハ筆力道勁自ラ雅敷アルヲ以テ是  
 逸重七二名刺ニ用ヒラレ大ニ江湖此喝采ハ博シ石版トモ之  
 尚鮮美本モ之此高評ハ辱ム所モ是候處右ハ獨モ名刺ノ之木  
 羅モ書籍其他廣告文等小御用為被成候ハ之更小一層美妙小  
 可有之候間多少ハ不諭陸續倍舊御注文被仰付度様奉希望候  
 敬白

追右行書活字ノ義ハ拙者種々ノ困苦ヲ嘗メ經驗ヲ積ミ莫大ノ資本ヲ費シ順治廿年ノ頃ヨリ母型製造ニ着手シ  
 漸ク發賣ノ運ニ至リ屢蒙昨今大坂地方ニテ右様類似ノ活字ヲ製造販賣致シ居様モノ有之趣ニ確ハ共右ハ自ラ巧  
 拙良否ノ區別有之拙者製造ノモノトハ大ニ相違致居候間御購求ノ際ハ莫々モ御注意可被ト奉存候也

● 改良手引ハンド(ハベシ)製造發賣

東京日本橋區長谷川町



江川活版製造所

大坂東區本町二丁目塚筋

東京江川文店朝日堂



# 廣告

印刷術ノ日ニ旺盛ナルニ隨ヒ活字ノ需  
 要益増加致候處當時價格ノ競爭甚敷竟  
 ニハ粗製ノ品ヲ販賣スル者有之實ニ痛  
 歎ノ至リニ御坐候弊店製造ノ活字及花  
 形等ハ職ハラ地金ノ品質ヲ擇ミ角昂低  
 等ハ泰西諸國ノ方則ヲ折衷致シ其標準  
 ナ確定仕候間江湖印刷家諸君唯ニ價格  
 ノ廉ナルヲ問フヲナク何卒不係多少陸  
 續御注文仰付被下度此段廣告仕候也敬  
 具

東京市京橋區

元數寄屋町二丁目十番地

活版製造所

明治廿四年十二月  
**製 文 堂**

★圖四三二一……「印刷雜誌」第一卷第九号（印刷雜誌社、明治廿四年一〇月刊）。

上段は活版製造所製文章（現大日本印刷）廣告、下段は清朝活字を開発した弘道軒神崎正誼の死亡通知。

清朝活版發明創製者

神 崎 正 誼

兼テ病氣ノ處養生不相叶本  
 月十四日午前第九時五分死  
 去致候間此段辱知諸君ニ御  
 通知仕候也

二白葬送ノ際ハ御會葬又  
 ハ御懇切ナル電文郵書ヲ  
 以テ御吊詞ヲ辱フシ奉深  
 謝候

東京市京橋區南鍋町貳丁目壹番地

活版製造所弘道軒

男 神 崎 正 愛  
 同 池 上 喜 之 助

久永其穎先生書  
行書第三号活字

發賣稟告

時下寒冷相催候處全國同業各位益御清福慶賀之至二奉  
存候陳者豫々御披露仕置小行書第三号活字此儀未も十  
一月十五日より愈發賣仕候各位も御承知の如く弊店製造能行  
書活字ハ方今名聲全國に漂いき彼の其穎久永先生が數月の日子を  
費し揮毫せられたる文字ふして優美流麗乃書自然雲起り龍躍の  
勢ひあり依て弊店ふ於ては技術ふ熟達せも良工は彫刻を命し勵精  
刻甚漸く發賣の順序は至り候ものなれば書体は鮮明なること他製  
造所の企及も所ふ何れも所謂雜群能一鶴といふも敢て誇言に  
あはざるを信是而して今也發賣の期日も切迫仕居れば企業各位

よ於ても先んずれば人を制是等の確言を服膺せしれ續々御注文何  
 ぶんことを希望仕候猶又今般中島器械工場製造は改良依取付足踏口一ル附属  
 一式共剛東一手賣捌は特約を結ひ爰許販賣仕候此器械ハ使用  
 法殊に容易小して彈て一人小て印刷を爲し得るものな是  
 ハ經濟上尤も有益なる良器なり世に印刷業者として高  
 牌茂掲ぐる各候ハ是非とも一基を括置せざる可らる依て活  
 字同様多々御注文被仰付度此段併て謹告仕候敬白

明治廿五年十月

東京市日本橋區長谷川町廿一番地

江川活版製造所

江川次之進

宮城縣仙臺市芭蕉通

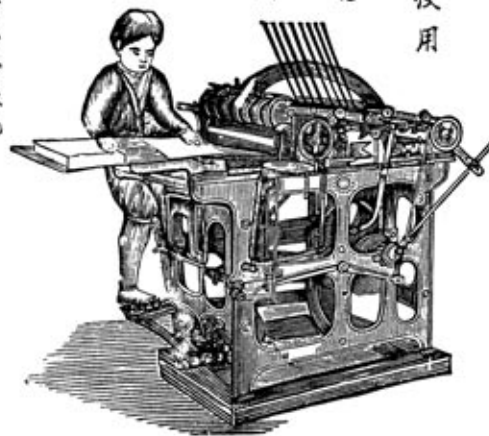
江川活版製造所

仙臺支店

大阪市東區本町二丁目塚筋

江川活版製造所

大阪支店



(部刷印版活書行川江町設新區橋本日 行印)

★圖四四一……四号・五号を使って組んだ江川三三行書発売廣告『印刷雜誌』第二卷第九号(明治三五年一〇月刊)。



『日本の活字書体名作精選』の九書体について、その背景と書体特性を綴りました。これほど長くなるとは思っていませんでしたが、書いてみて書体の開発の後ろにはその時代の息づかいがあることを再確認できました。府川充男氏は「いかなる書風も時代の子である」と言っておりませんが、まさに名言だと思います。

★江川活版三号行書仮名(二四級)

あめつちほしそらふやまかほみねた  
 にくもきりむろこけひといぬうへす  
 ゆわさるおふせえのをたれあてん  
 アメツチホシソラヤマカハミネタ  
 クモキリムロコケヒトイヌウヘス  
 ワサルオフセヨエノタナレキテ

◎組版仕様

書体=ヒラギノ明朝 Std W5 (漢字・欧文・アラビア数字) + 江川活版三号行書仮名 (仮名, 「日本の活字書体名作精選」より)

見出し=サズ: 60 級/本文 (p.162)=サズ: 24 級, 字送り: 30 齒, 行送り: 36 齒

本文 (p.163, p.173)=サズ: 16 級, 字送り: 20 齒, 行送り: 30 齒, 1行: 33 字詰め・22 行

◎発行=大日本スクリーン製造株式会社 ◎デザイン・組版=向井裕一 (gymh)

(2005.03.18)